東風雪物語 卅
武藤
へ13
3838
3

松林堂製

白縫
捻華寺鐘楼堂建立
十一編上
乃語
種員作
國貞画
柳下文庫
再板
十一編下

種員作
國貞画
白縫譚
十二編上
作題曲亭馬琴
十二編下

帝へ13
號3838
卷3

柳下亭種員作

白縫譚 第十二編 下冊

楳蝶樓國貞画

楊寶ハ玉環を與へ正直爺ハ葛籠を送るハ倭漢髣髴雀ゞ恩ハ報ゝ話巻中ハある物語も農夫ゞ餌飼ー瓦雀の爲ハ九死を免れ一生を保ゝ其本據ハ續醫説ハ誤呑金銀銅鈔入腰若韭菜熟而不斷咽之不過二次從穀道出とハつると外ハ今固或入昔談ゝて予ハ告ゝ雀の奇事を種とするれば序文ハ也。僅轉舌切雀御宅ハ何所ハ在とも看官の佳童連此編の發販あゝバ必近邊の稗史舗ハ賈得御覽を冀と言ゝ則稗官中ハまゞ黄口の聾ある

嘉永癸丑孟陽

柳下亭種員記

海賊張本
玄海灘右エ門
一度名乗
毛剃九右エ門と呼

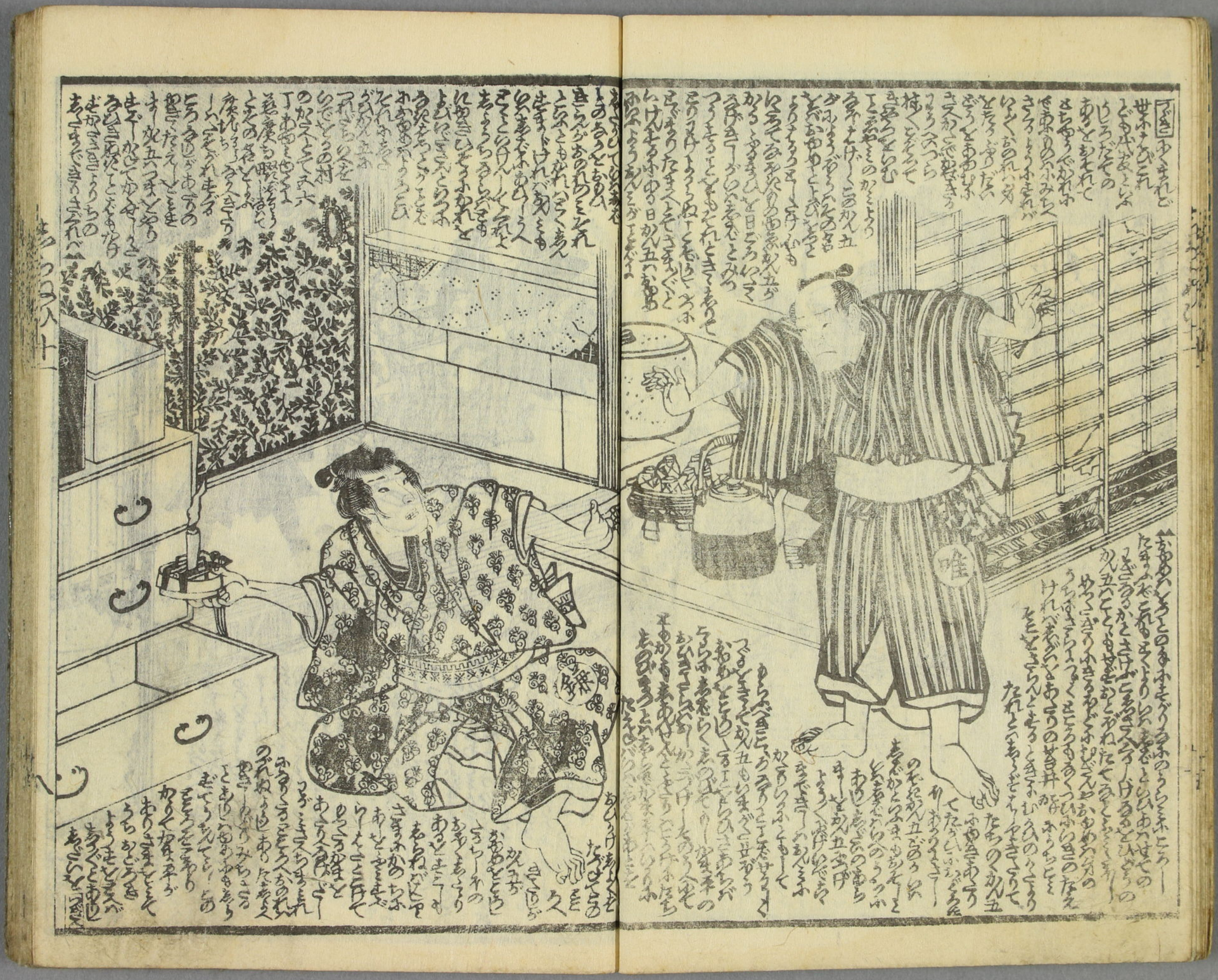
捻華禪刹の
鐘楼堂ゑ黒白の
兄弟偏剃と挑む
此段八十二編より十三編ゑ
亘の話説ゑり

就鳥津の頭目
萩原猪助

猪助が兄捻華寺の
鐘楼守頓念

元仁元年甲申歳次龍集
光珠山捻華禪寺
九五世現住栄快

十人ようぐき
唯
白

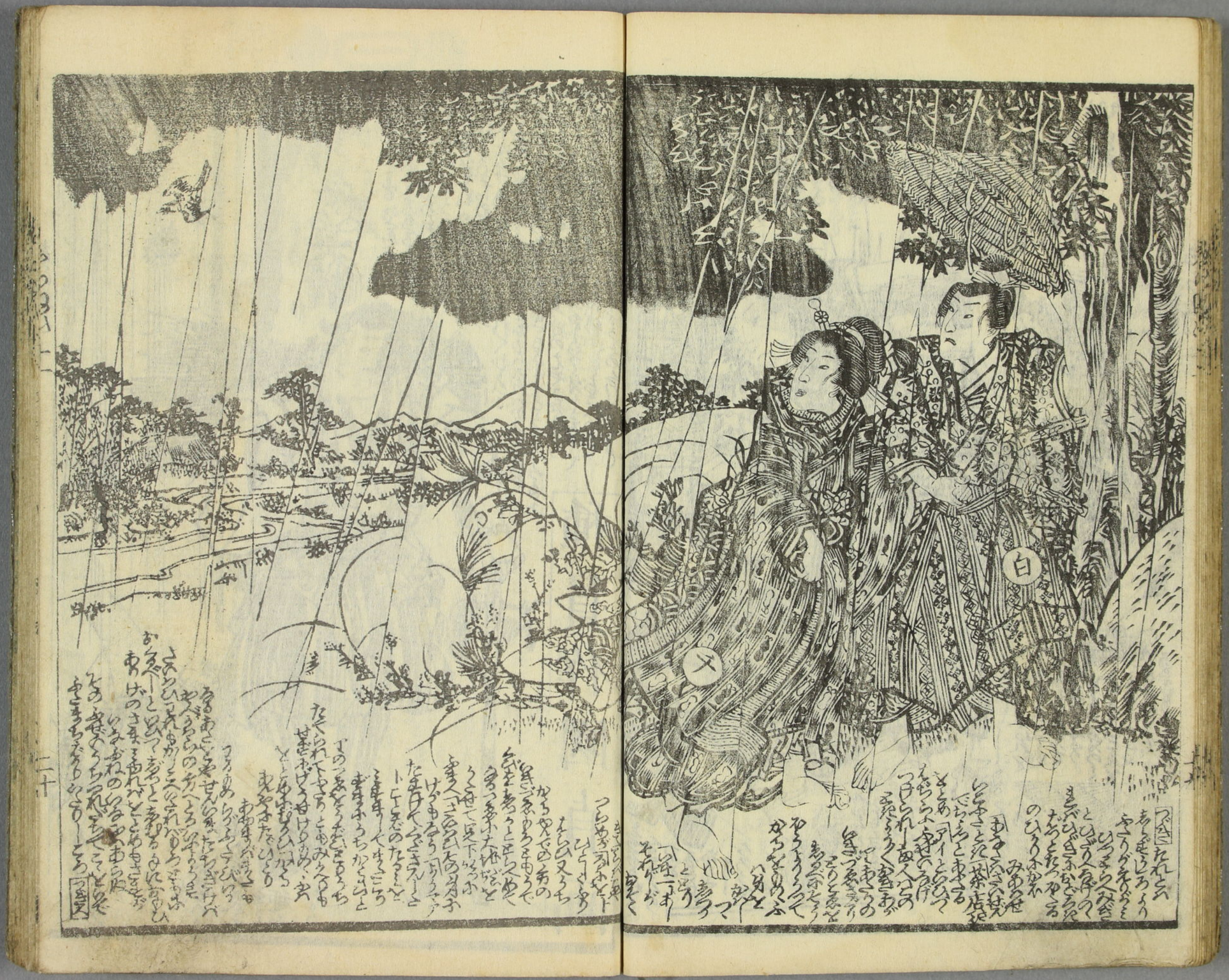


此人物の詰解へ
次の巻にそなる

種員作　國貞画

熊島津
頼母
六郎七郎
父子

萩原作内
頓介猪助
父子


白
文

種員作國貞画

秋作が此姿ハ遥か後の巻の趣向なり

近松門左衛門が生涯ふ數種著したる浄瑠理の中抜群く新奇の一種曾我會稽山と題号ハ建久四年五月廿八日の明七を初段とし鎌倉の柳營ふて政子御前が御狩の獲物を御覧あるとゆのう弟序祐成と時致が烈敵工藤の狩家に忍びて本望を達する場が夜ハ大切ふて十二段を十二時の昼夜の間ふ仕組入寅の上刻を發端とふて丑の下刻ふ全く終趣向ふて〳〵が一部の工夫加之巣林子（近松別号）が筆頭よりいでられが數遍ふ操返し讀ふ倦ざる例の妙作彼兄弟が報讐の十八年ふハ〳〵ひとつ〳〵ふ件院本を假借くと積年腹匠く當歳漸此冊子の十編より十五篇ふ〳〵乗ふて昼夜のとく綴ふ〳〵巻中の文をもて時刻を

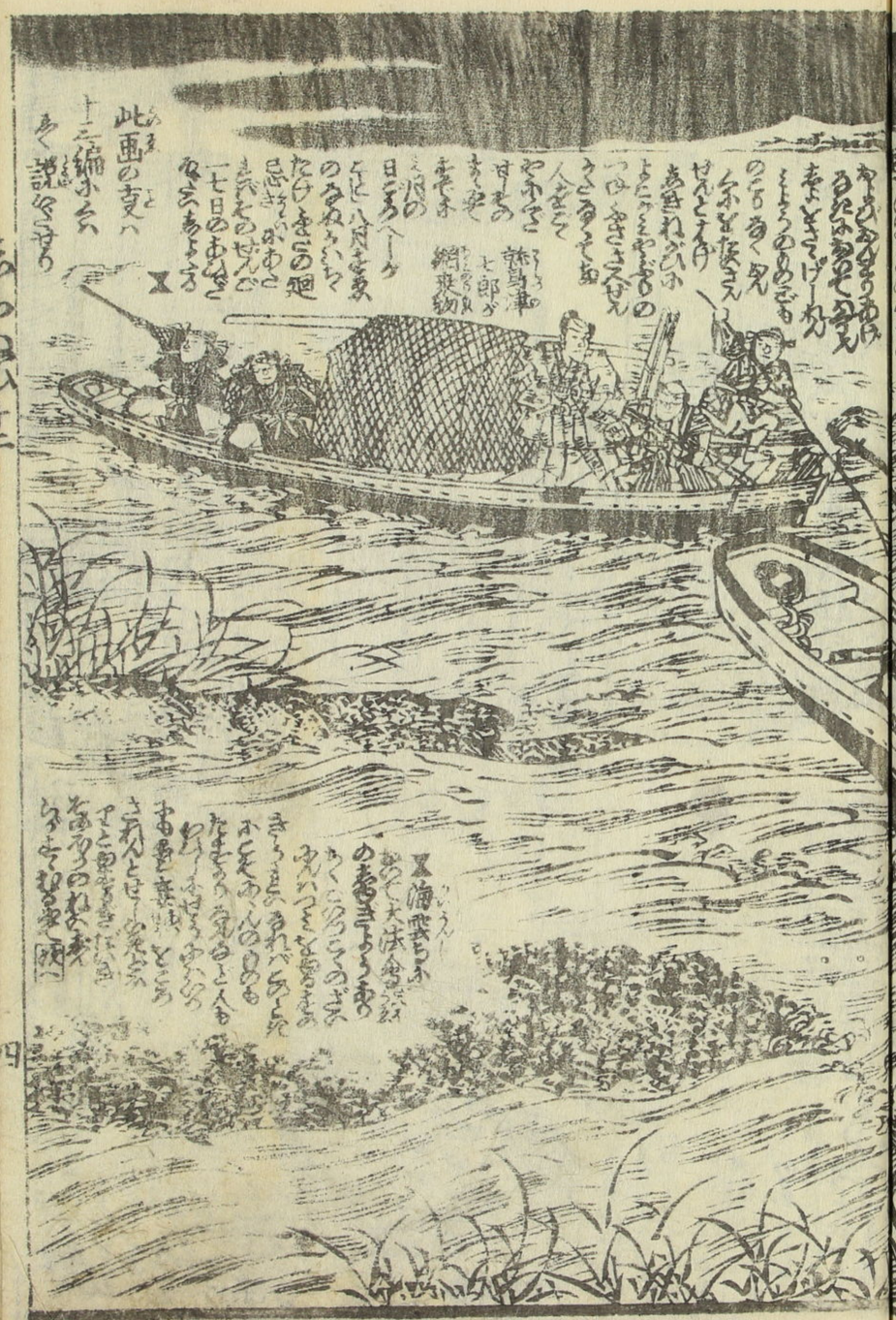
少貳經房の愛妾
小女郎
実は鯰蟷の妖怪
曲五周忌
太宰の遊臣
三原要人
太宰武房の後室
香壽院

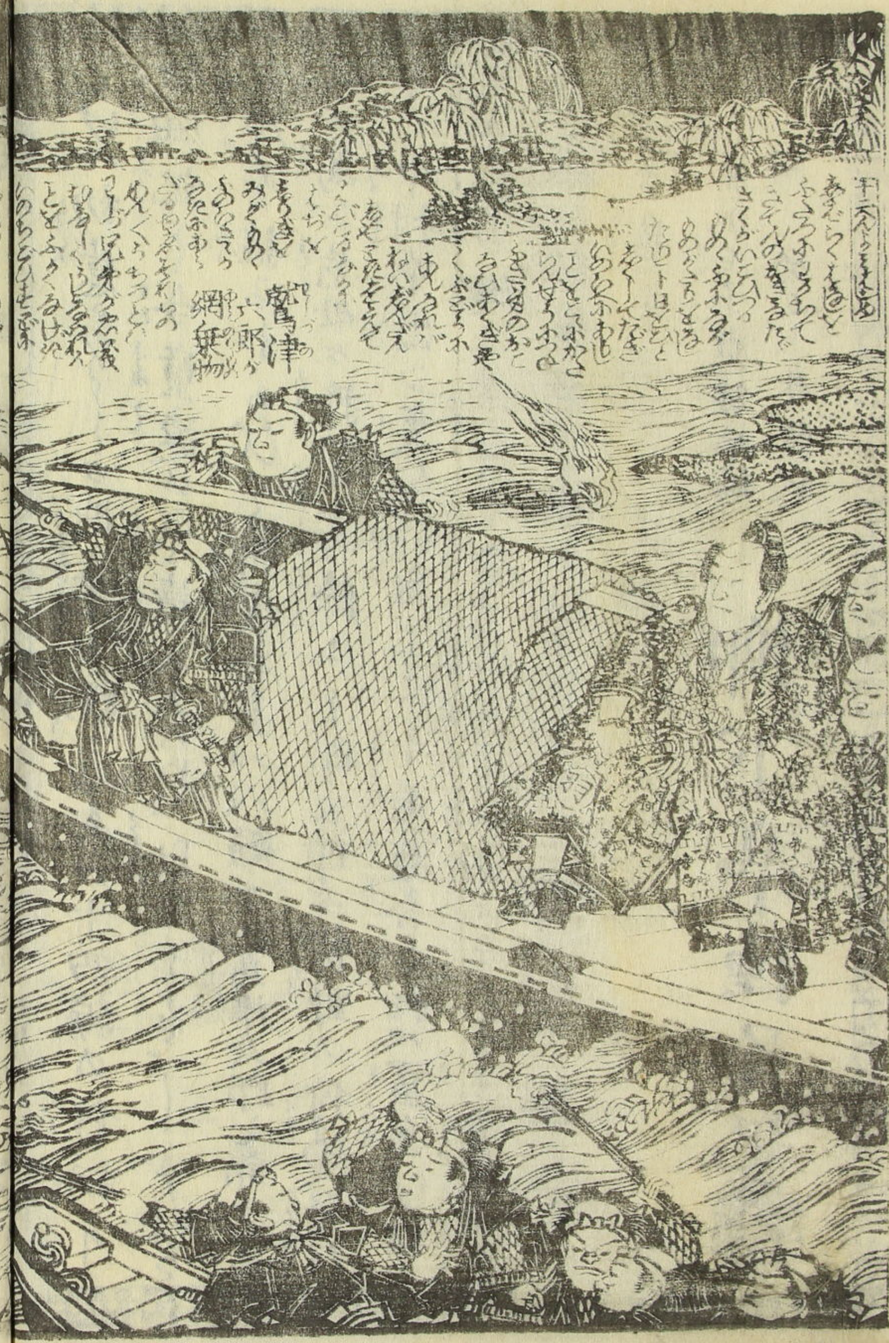
ちけん初意あるべしの拙筆ゟ説うぬもバ十四編の舒詞ゟ微細記く今童達の惑讀ゝまゝ一助ゝおもゝ〳〵ゝさしゝ此序を誌ゟおよびく再度おりゝバ八編ゟ鷲津六郎七郎ゞ名残の爲ゟ老母ゞ許へ立寄條ゟ十郎五郎ゞ裾野の狩場へ發行として中村を出る吏を引用しゝ不圖暗合ゝれバ冨岳くゝ雪の色白縫の佳評もまゝ弥高く江湖上ゟきこえ曾我殿原ゞ小袖の摸様衡也蝶ゟひらく〳〵く翼ゞ生く飛ゟ四方ゟ售を混空ゟ廢幾而已

嘉永壬子應鍾結稿

同　癸丑上春發販

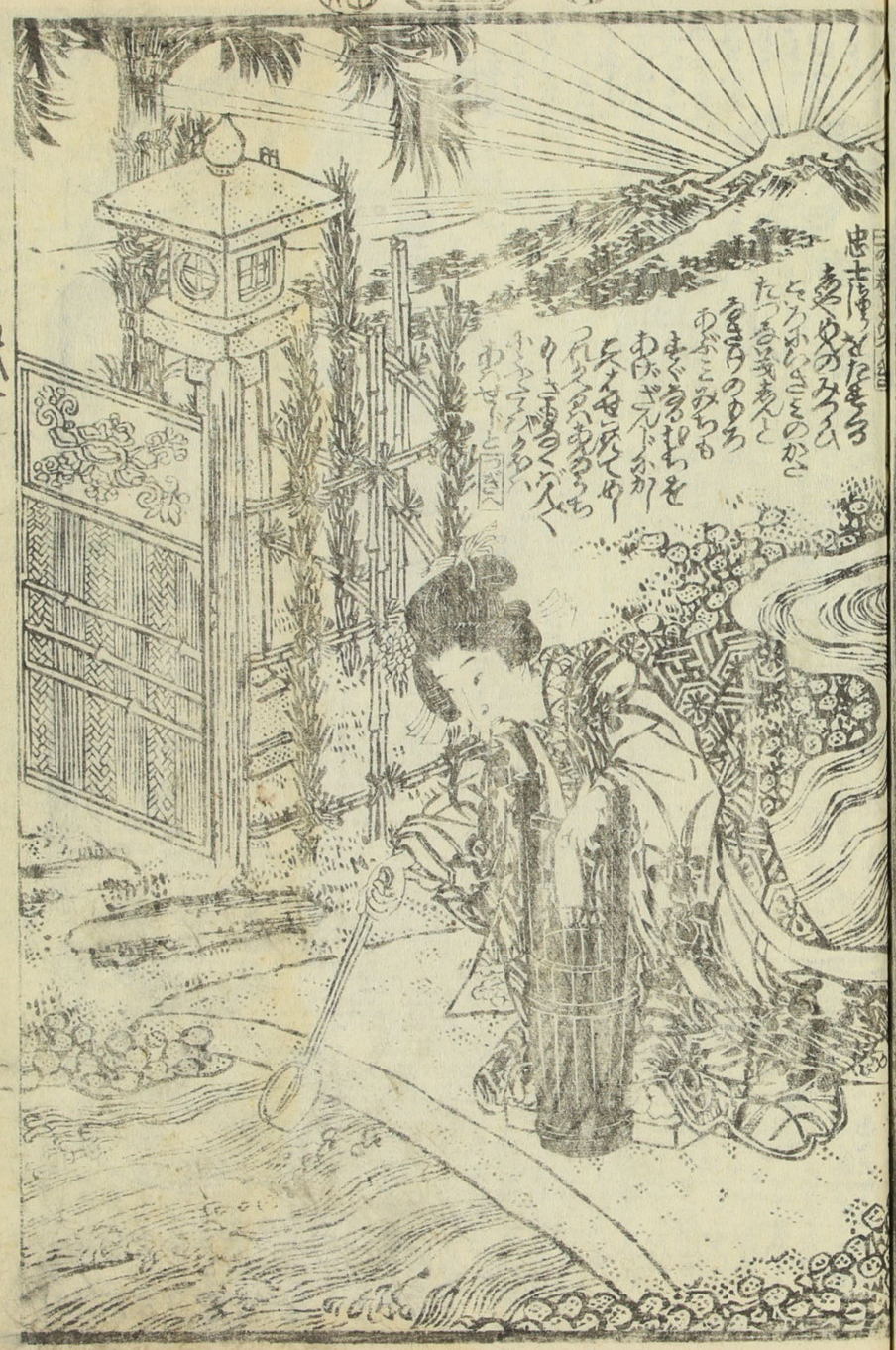
柳下亭種員記





香寿院
北の殿へ
かりゆく
ところ

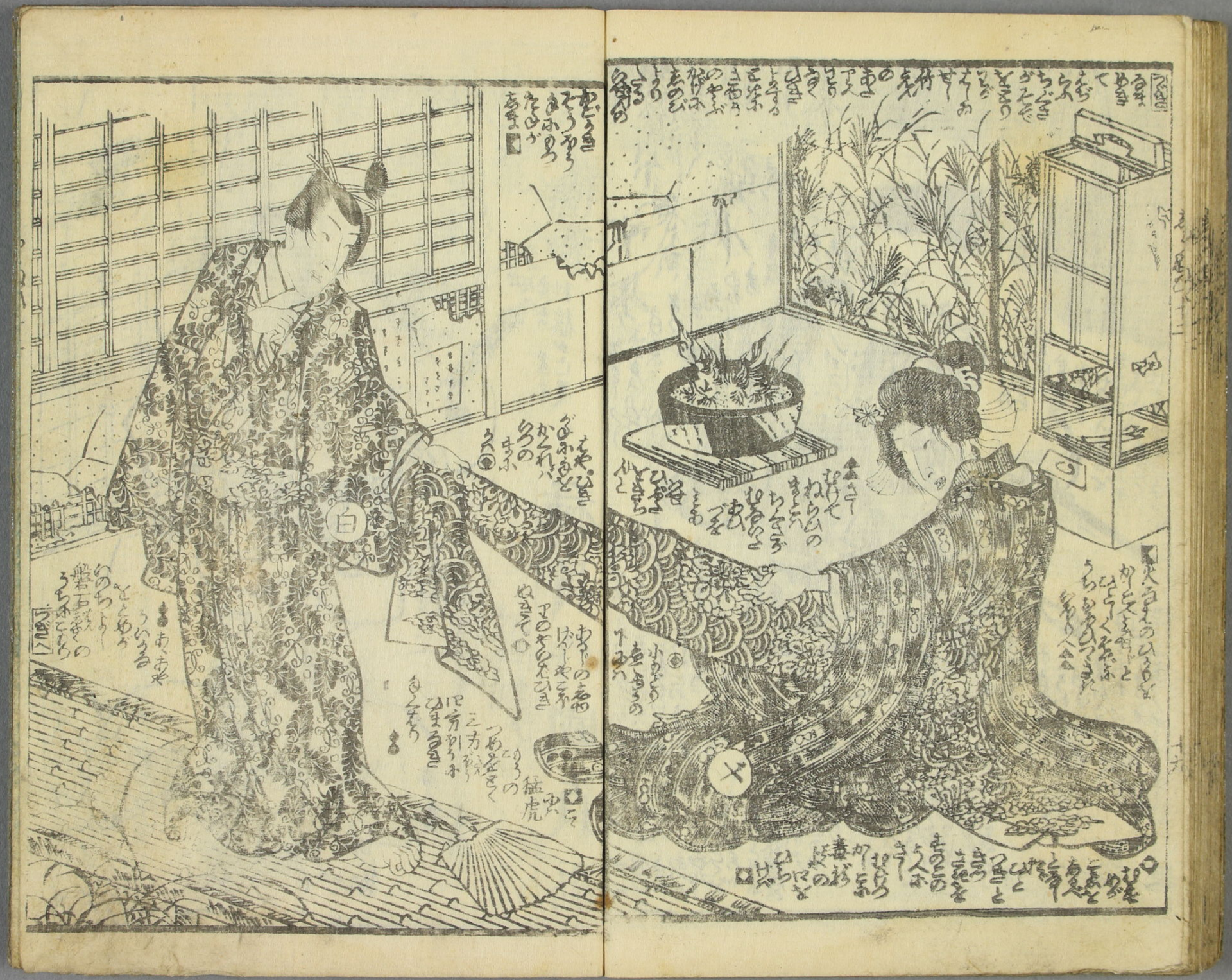
種員作國貞画



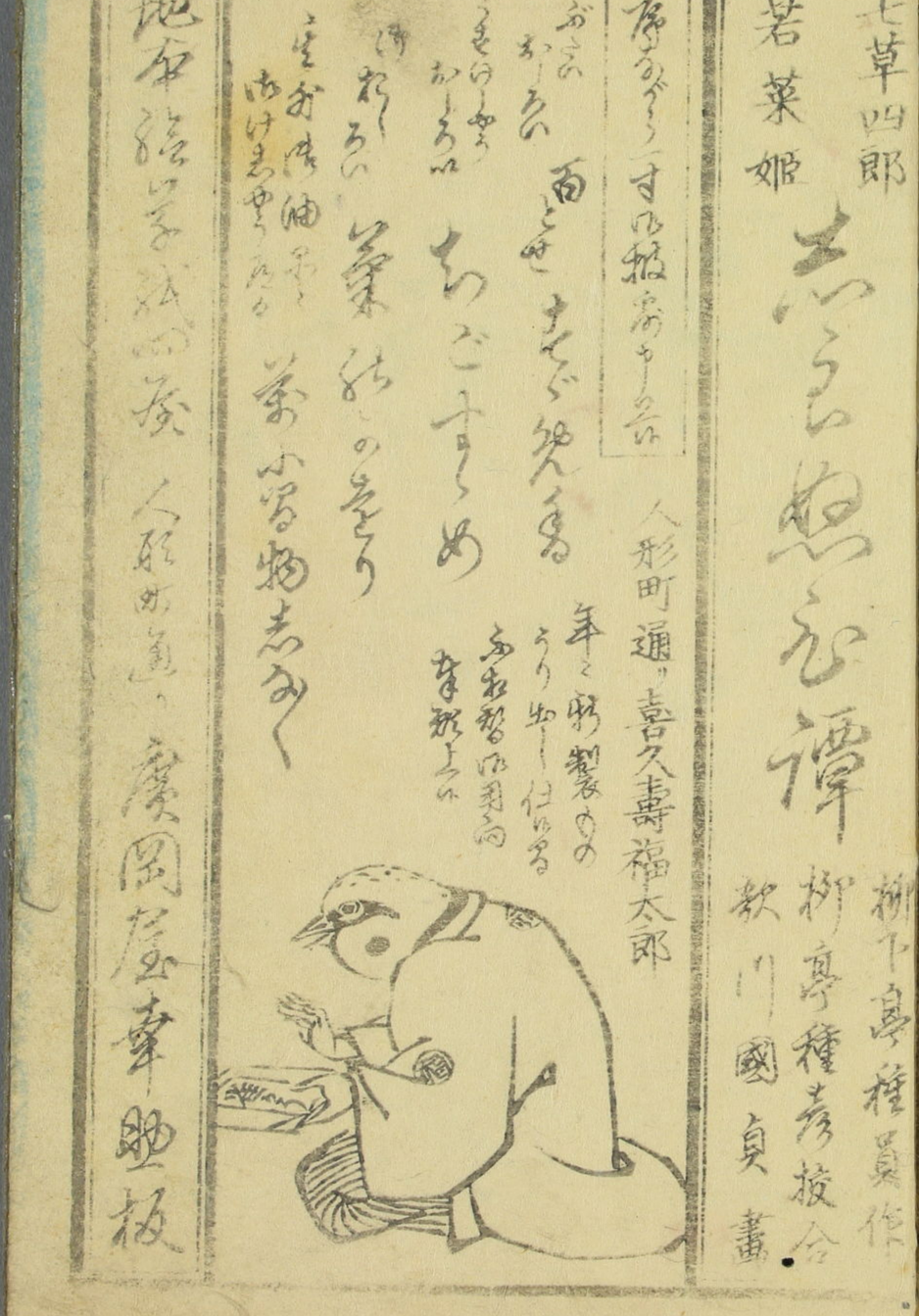
後法
上の巻の末にある
石像大割を遣

水盡を
此事は
の話解
海難右門の
太事の家
入込條
説べ

白



七草四郎
若菜姫



[illegible]